

宇野 隆夫著

## 『考古資料にみる古代と中世の

## 歴史と社会』

高橋 照彦

周知のごとく、近年のわが国における発掘調査件数は増加の一途を辿っている。そしてそれに伴い、奈良・平安時代は言うまでもなく、中世以降に關しても考古資料の著しい集積をみている。

その結果、ともすれば文献が無いか或いは乏しい時代にのみ研究が集中しがちであった考古学において、実質的にその対象領域が拡大され、文献などでは解明できなかった新たな事実の呈示にもつながってきている。特に古代から中近世に及ぶ土器・陶磁器の研究は目ざましい進展を遂げており、本書はその研究の最先端の状況を示すものといつてよいだろう。もちろん本書の目指すところは単なる土器・陶磁器そのものの研究ではなく、土器・陶磁器を含む考古資料を通して、「古代」や「中世」の具体相を解明し、さらにその具体的諸事象を有機的に解釈することによって日本の歴史全体の中に位置付けを与えることが追求されている。それは、研究の個別細分化が進む考古学において、今後のあり方を考えるまでも示唆を与えるものといえるだろう。

それではまず最初に、本書の構成を列挙しておく。

### 一、古代的食器の変化と特質

二、越中の国府・莊家・村落

三、一〇・一一世紀の土器・陶磁器

四、後半期の須恵器

五、越中弓庄城跡の土師器

付 美濃各務原市採集の戦国期土師器

六、丹波周山窯址の須恵器

七、白河北殿北辺の土器・陶磁器

八、鴨東の開発

九、越中立山町分布調査から

一〇、井戸考

結び

一〇章は既発表論文であり、「結び」は新たに執筆されたものである。本書の構成順とは異なるが、各章の内容を簡単に紹介しておきたい。

第七章「白河北殿北辺の土器・陶磁器」は、筆者らによって調査された京都大学構内遺跡の発掘調査報告書よりまとめられたものである。これは、筆者の食器研究の出発点といつてよい論考である。注目される点を列挙すれば、①平安京・中世京都の土師器編年の提示、②土器構成及び比率への着目とその重視、③土器比率算出のための口縁部計測法の採用の三点となるだろう。特に①については、この論文によって平安京における古代・中世の時間的枠組みがほぼ完成された点で意義深いものといえる。

第六章「丹波周山窯址の須恵器」は、第七章とともに事例研究の一つである。個々の遺物報告に続いて出土須恵器の編年を試み、その上で畿内中心部の須恵器と対比し、一器種——法量の伝統を

残す点、波状文が残存する点などの地方色を見いだしている。また、第七章の編年で初めて採用された口縁部計測法については、本論文中において他の数量計算方法との比較を試みることにによって、その有効性の確認も行われている。

第一章から第五章は、第七章「白河北殿北辺の土器・陶磁器」を承けて展開された食器研究の諸論考である。時期的には、第一章が六世紀末～一二世紀半ば、第二章が九世紀、第三章が一〇・一一世紀、第四章が九世紀～一四世紀、第五章が一六世紀を中心に扱っている。具体的内容は後述することとし、概要のみを記しておきたい。

まず、第四章「後半期の須恵器」は、第七章で十分に言及できなかった須恵器に焦点を当てたものである。九・一〇世紀以降の須恵器生産は従来衰退過程と捉えられがちであったが、本稿は中世への新たな展開期として再評価を試み、九～一四世紀の平安京・中世京都出土須恵器の編年とその画期設定を行っている。

第一章「古代的食器の変化と特質」は、古代の様々な食器の時期的変遷と地域的様相に関して、現在の知見を整理・検討した上で、その特質や歴史的意味の解明を試みている。第四章「後半期の須恵器」では古代でも後半以降の特質の一端が言及されていることもあり、本稿ではそれ以前を中心に取り扱っている。

第三章「一〇・一一世紀の土器・陶磁器」は、中世土器研究会第四回研究集会における発表の総括として執筆されたものである。一〇・一一世紀の土器・陶磁器の変化の内容が要領よくまとめられている。

第二章「越中の国府・荘家・村落」は、時期・地域を限定し、

遺跡の性格による食器構成の相違の実態を捉えようとしたものである。検討の結果、公的な様相の強い場合ほど、土師器・食膳具・施釉陶磁器・鉄製煮炊具の比率が高いことが明らかにされ、そこから後述する「宮廷的なあり方」の広がりを見いだしている。

第五章「越中弓庄城跡の土師器」は、富山県東部所在の弓庄城から出土した土師器を取り上げ、同時期の京都の様相と比較することにより、その年代的位置付けと京都からの影響関係を考察したものである。結論的には、北陸の土師器が一世紀中頃～末と一六世紀初め前後の二つの短い時期に京都からの強い影響を受け、以後独自に変遷したものと考えられている。本章の付論「美濃各務原市採集の戦国期土師器」も、京都産土師器の影響を受けた一六世紀の在地製品を取り扱ったもので、京都系土師器の拡大化現象を考える上で興味深い資料提示となっている。

残る第八章「第一章は、食器以外の考古資料を対象としたものである。第八章「鴨東の開発」は、文献資料と考古資料の両面から開発の歴史を辿り、平安京とその近郊としての鴨東地域の関係を論じている。第九章「越中立山町分布調査から」は、筆者の指導のもと富山大学文学部考古学研究室が精力的に進めている富山県立山町の一連の調査のうちから分布調査関係についてまとめたもので、特に古代・中世における開発の側面からの検討がみられる。第一〇章「井戸考」は、井戸の発達とその普及について、その初現から現在に至るまでの系統的把握を試みた力作である。

最後に「結び」であるが、これは個別的研究所の総括的小論と呼び得るものである。筆者の歴史観が示されており、興味深い。時代区分に関する言及をまとめれば、日本の歴史は一つの大画期と

二つの転換期によって位置付けられるとしている。大画期は縄紋から弥生への転換、大画期以前の小画期は縄紋時代前期中頃（諸磯式）、大画期以降の小画期は筆者のいう古代前期と後期の境（九世紀中頃～末）に置いている。

以上が本書を構成する各章の概略である。次に、本書の中心課題とする食器研究に関して、第一～四章・結びなどをとに筆者の考えを要約しておきたい。

まず、古代前期（六世紀末～九世紀初め）の食器の特質としては、西弘海氏<sup>①</sup>によって指摘された、土器類の金属器指向という面と、多様な器種・法量分化とその一方で土師器・須恵器の互換性の確立に注目し、さらにそれに筆者が独自に意義付けを行っている。

前者の金属器指向については、六世紀末から七世紀初めに畿内において顕在化するが、朝鮮においてより明確に金属器指向が現れることから、金属器写しという為政者の理念そのものの移入を想定している。またその理念は、階層を越えて共通の器形を用い、しかも最上層の人々の食器が仏器である金属器そのものであることから、「仏教が本来的に持つ平等性に根ざした普遍性」と「仏への近さを階層差と考える古代仏教の特質」が背景にあったと解釈されている。

後者の多様な法量分化は、畿内では七世紀第Ⅳ四半期に確立するが、これは大量の官人層に身分に応じた食器を供する目的を有するものと捉えられ、律令国家の官僚制の整備と表裏をなすとしている。このような古代前期の食器様相の地方への波及は、西国や北陸では七世紀代に及ぶものの、東国では八世紀代になってから

とされる。

八世紀後半になると、畿内で土師器生産の合理化と比率の増大がみられるのを始め、広範な地域で古代前期の様相が多様な変質を遂げていく。これについて、筆者は國家財政の窮迫や物価騰貴といった経済的要因から生産コストの低減を目指した動きと解釈している。ただし、土師器の増加現象には上記の理由に加えて別の重要な要因が存在するものと考えられている。それは、宮のあり方を民衆に貫徹するという政治的な要因である。八世紀前半の宮の食膳具では土師器の比率が著しく高いが、それは食器の素材が身分差を表徴するため下位の者が使用する土師器を多くする必要が存在したからとする。そして、そのような宮廷のあり方が「公の意図」のもとに八世紀後半に畿内の村落や西国に、九・一〇世紀には北国や東国に及んだものと考えられ、そこに身分秩序を重んじる民衆の風習の起源を求めている。

古代後期（九世紀中頃～一二世紀初め）には、先の土師器の比率増加が進む一方で、須恵器が、壺・甕・すり鉢といった特定器種の広域流通へと転換し、施釉陶磁器も高級食膳具や小型貯蔵具の広域流通へ、他方黒色土器は土師器との器種分業へと変化する。それは、中世的様相の形成過程と評価されている。さらに一世紀中頃には食器構成は簡素化し、中世的土器様式の骨格となったとする。

中世前期（一二世紀中頃～一四世紀末）の特質としては、高級な中国製陶磁器・漆器の食膳具や大型の貯蔵・調理具の広域流通と普及、そして在地・遠隔地の各種製品による複雑な食器様式の確立を考えている。このような食器複合を達成する背後には、食

器の地域・器種分業体制と呼び得る生産・流通の発達があるとする。

中世後期（一五世紀初め～一六世紀中頃）には、土器食膳具が皿形態に限られるようになる。須恵器生産は、西国では一五世紀に、北国でも一六世紀に衰退し、備前や越前では酸化焰焼成に転じ、瓷器系の東海においては施釉陶器が目立つようになるというように様相の変化がみられる。備前や東海の新たな動きは、器種の多様化を計りながらの一層の集中的生産と評価され、在地製品も加わるにより競合の様相が生じたものと捉えられる。それはまた、多様な国産陶磁器が競合する近世的食器様式への歩みでもあったとされる。

古代から中世に及ぶ食器の変遷のうちで、筆者が最も強調するのは、古代前期と後期の境である。この境の時期に、権力者と民衆の間の所有物の格差が拡大から縮小へ変わると考えられており、その時期が上層の人々の文化が先行する段階から都市の文化が先行する段階への転換期でもあったとする。またその時期以降の動向は、多様化が進むことに特徴付けられ、また一方では、技術面の進展に代表される民生の向上という明の部分と、先に挙げた身分や格式を重んじる宮廷的あり方の浸透という暗の部分の二側面が存在したとする。そして、この時期こそが弥生時代以降を二分する転換期であったと主張されるのである。

以上、本書の各章を概述し、食器に関してはやや詳しく触れてみた。次に本書の内容、特にその中心をなす食器に絞って若干の検討を試みることにしたい。

まず、古代前期の土器類の金属器指向の背景について取り上げ

ることにする。筆者は、先にも述べた通り仏教思想に基づく「理念」の移入を考えている。この時期の朝鮮三国文化の流入には仏教を初めとする思想面の受容があったという点を重視したものであって、その理念が土器様式を規定したという非常に興味深い指摘だといえる。ただ、「理念」の有無に関しては、考古資料のみから実証するのは困難な面が多く、実際筆者の想定も十分な根拠付けによって裏打ちされているわけではない。そこで、現状では少なくとも筆者の仮説を成り立たせる前提条件としていくつかの点が明確化される必要があるように思う。その一つを挙げれば、朝鮮半島において土器の金属器指向が強いのは事実だが、これが仏教思想を背景とするものであったか、もっと端的に言えば、朝鮮における銅鏡を初めとする金属器が仏器としての性格を有していたのかという点がある。この点は必ずしも明らかにされたわけではなく、現状ではむしろ仏教との特殊な関連を物語る例はないらしい。もしそうだとするならば、朝鮮に典型的にみられる金属器指向、ひいては日本の同様のあり方も必ずしも「仏器そのものであることから階層差を顯示し得る」という古代仏教のあり方と結びつける必要がなくなるであろう。

次に問題としたいのは、八世紀後半以降に全国的にみられる窯業生産の諸変化についてである。筆者はその変化の要因が、生産コストの低減を目指すものであったと考えている。評者も、畿内における土師器の器種構成の簡素化と仕上げの省略化、さらに須恵器生産の衰退化といった現象は、経済的側面に起因する生産コスト低減への動きとして理解することが妥当であると認めたい。ただし、コストダウンという要因によって、一律に全国の動向を

捉えてよいのかは検討の必要があるように思う。例えば東海の須恵器生産はこの時期以後急速に生産の拡大を遂げるが、これも筆者は畿内と同じ生産コスト低減を目指す地域的な現れ方の相違と理解するのである。しかし、東海でも一大須恵器生産地であった猿投窯跡群においては、八世紀後半頃からいわゆる「原始灰釉陶器」が生まれるとされており、それが人為的施釉か否かは別として、その高火度焼成がおのずと多量の燃料を必要としたであろうし、焼損度の増加を生むことも予想される。これは、筆者の考えるようなコストダウンという方向とは相入れず、むしろ別の原因を想定する必要があるのではないだろうか。筆者の指摘するように、東海地域の須恵器においても、法量の分化が乏しくなり、器種の消滅がみられるなどコストダウンの動きと捉え得る側面があるのも事実であるが、東海の須恵器生産そのものの隆盛がコストダウンとして捉え得るか、あるいはその要因を第一義的であると見なし得るかは、他地域も含めて問題とされるのではないかと考えている。

次に、筆者のいう地域・器種分業体制を取り上げたい。地域・器種分業体制は中世の特質の一つとして挙げられているが、その初現として須恵器生産の側面から一〇世紀初め頃に画期を見いだし得るとしている。筆者はその根拠として、九世紀の京都洛北には須恵器・施釉陶器という京で使用する陶器一式を供給する体制があったが、一〇世紀には平安京出土須恵器は丹波篠窯産が、緑釉陶器は平安京西郊産が主となる点を挙げ、この一〇世紀初めに地域・器種分業体制の成立を考えるのである。しかし、一〇世紀以降の篠窯では、前山二・三号窯や黒岩一号窯などのように須恵

器より圧倒的に多量の緑釉陶器食膳具が焼成されている点には注意しておくべきであろう。つまり、九世紀の洛北が陶器一式の供給を行ったとすれば、一〇世紀以降の篠窯も平安京で使用する陶器一式の供給地ということができ、一〇世紀初めをもって地域分業成立の画期とは必ずしもみなしがたいのである。また、一〇世紀初めに篠窯において食器一式の在地供給と壺・甕・すり鉢などの特定器種の広域流通という二相供給が成立したとされる点も若干問題となってくるだろう。なぜなら、篠窯の広域流通品は須恵器では確かに壺・甕・すり鉢であることで間違いはないのであるが、緑釉陶器の碗・皿類も広域流通しているからである。いうなれば、緑釉陶器碗・皿、須恵器壺・甕・すり鉢の広域流通ということになり、平安京あるいは都市的食器一式の広範囲の供給とも表現できるのである。したがって、二相供給というのも、この時点の篠窯全体でみれば在地供給品と広域流通品で食器組成が異なるというあり方だったといえるわけである。以上のように考えるならば、二相供給の成立期についても、別の考え方も可能になるだろう。九世紀の篠窯の生産内容をもてみると、杯・皿といった食膳具が多数を占め続ける窯も少なくない。しかし、平安京では九世紀後半ごろから須恵器食膳具が急減し、須恵器貯蔵具などよりも少なくなる。このことは、供給先による器種組成差が生じていたことを示すものといえ、その意味での二相供給は九世紀代までさかのぼらせ得るといってもよいのではないだろうか。もちろん、一〇世紀初めが篠窯を初めとする須恵器生産において一大画期であったことを否定するものではないが、実質的内容とするところは、再考の余地も残されていると思われる。

さて次には、本書で筆者が最も強調する「宮廷的なあり方」という点を問題にしてみたい。おそらく検討されねばならないのは、全国的にみられる土師器主流化現象が、支配体制の動揺あるいは変動などに起因するものではなく、公の主体的意図に基づくものであったのかという点と、もしそうだとした場合に階層性の顕示という宮廷的なあり方の民衆への貫徹にあったのかという点であろう。ここでは特に後者に焦点を当ててみることにする。筆者は、宮廷の土器のあり方として、下級の者が使用する土師器が比率を高めねばならない一方で、高級な施釉陶器や漆器は必要なものであると同時に普及してはいけないものと考えている。ただし、九世紀以降の施釉陶器は、その生産量が急激に増加し、平安京では食膳具の一〇%程を占めるといふように食器組成として欠くことのできないといえるまでになっている。これは、普及してはならないのが宮廷における施釉陶器のあり方とすれば、矛盾した動きといわざるを得ないだろう。同様のことは須恵器についてもいえることで、土師器より高級とされる須恵器は、筆者の考えに従えば土師器より普及してはいけないと同時に施釉陶器よりも量的に多くなければならぬことになる。しかし、その後の経緯は、土師器同様粗雑化が進み、最終的に食膳具から撤退するのである。したがって、八世紀前半にみられた宮内のあり方が、単純に京や全国各地に広がったとする事には問題があるだろう。また、土師器と同じく宮廷的なあり方を示すとされる鉄製煮炊具の広がりも、土師器主流化の動きと地域によつては必ずしも対応していない。官廷的なあり方の広がりの根拠として、土師器主流化現象以外の要素が存在し得るのかといった点も含めて、もう少し突っ

込んだ議論が要求されるのではないだろうか。

最後に、民衆の食器と権力者の食器という点に触れておく。その二者の格差への着目は斬新な視点といつてよいだろう。しかしながら、格差がなんらかの指標により客観視し得るのかが明確でなく、具体的内容も論及されていないため、その格差の転換が古代前期と後期の間に求め得るという指摘も十分な説得力を持ち得ていないように思われる。具体的実態の不明瞭さは、「結び」の時代区分に關しても多少感じられることであり、別稿においてその具体的理由付けやさらなる理論的展開が加えられることを期待したい。

以上、個別的内容についていくつかの問題点を取り上げてみたが、個々の内容以上に重要な意味を持ち、しかも本書を特徴づけるのは、むしろ筆者の方法論や視点といったものだと考えている。その例の一、二を挙げれば、第一〇章「井戸考」や結びに典型的に見いだされる非常に長い歴史の変遷の中で事象の本質を捉える方法や、第二章「越中の国府・莊家・村落」や第九章「越中立山町分布調査から」を初めとする地域史から全体を見通す視点などである。本書の序に、考古資料は「時期の新古・中央と地方、身分の高下等による資料の片寄りが比較的少ないことが最大の強み」と記されているが、本書の諸論考はまさしくその「強み」が随所に発揮されているといつてよいだろう。考古資料を通して「古代・中世の歴史と社会」を説明する取り組みはまだ始まったばかりである。今後本書を基礎に、古代・中世考古学が益々進展し、総り多き成果が生まれることを切に願うものである。

個別的内容が多岐に亘るため紹介し尽くせなかった部分も多く、

また筆者の主旨を誤解・曲解した点も少なくないであろうが、ご寛恕を乞う次第である。

① 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集 一九八二年。

② 毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」『考古学雑誌』六四—一九七八年。

③ 京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第一冊（一九八九年）。

④ 京都市埋蔵文化財研究所『北野庵寺』（一九八三年）（A5判 四二頁 一九八九年二月 真陽社 四二〇〇円）

（京都市大学大学院生